



丹波篠山市史編さん事業の現状と課題（〈特集〉自治体史編さんの現在：参加と活用の新しい取り組み）

成田，雅俊

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 15:16-24

(Issue Date)

2023-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100489530>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489530>



丹波篠山市史編さん事業の現状と課題

成田 雅俊

はじめに

丹波篠山市史編さん事業は令和元年度（二〇一九）に事業着手し、令和一〇年度（二〇二八）完成を目指して取り組んでいるが、早くも本年度で折り返しとなる五年目を迎えた。筆者は全体計画案が作成された翌年の令和二年度（二〇二〇）から本事業の担当者となった。過去に文化財の業務に従事していた経験はあるものの、古文書を始めとする歴史資料（以下「資料」）の取扱経験はほぼなく手探り状態であったが、多くの方々の温かい支援を受けながら何とか進めてきたというのが実状である。本稿では、筆者の経験を踏まえながら、市史編さん事業に着手する前後の状況から現在までを整理して報告することにする。

一 丹波篠山市における歴史資産の保存と活用

丹波篠山市は、兵庫県の中東部に位置し、京阪神から一時間程度で行き来できる距離にある。平成一一年（一九九九）四月に旧多紀郡四町（篠山町・西紀町・丹南町・今田町）が合併して「篠山市」となり、さらに令和元年五月に「丹波篠山市」に市名変更した。人口は約四万人、面積は三七七・五九km²で、美しい自然と日本農業遺産に選ばれた丹波篠山黒大豆を始めとする豊かな農作物に恵まれ、また日本遺産の認定を受けたデカンショ節や丹波焼を始めとする多様な歴史資産を有する町である。

こうした市内にある多様な歴史資産を保存・活用する取組は、平成一一年の合併以降、加速度的に増加する。城下町と宿場

町・農村集落の2地区の重要伝統的建造物群保存地区選定、八上城跡の国史跡指定、史跡篠山城跡の公有化及び二の丸・内堀整備、歴史文化基本構想・文化財保存活用地域計画などの策定、その他国・県の補助金等を活用した各種事業の実施など、旧町時には埋蔵文化財調査に追われる状況下でマンパワーや予算面での課題を抱えていたことなどから、合併前には本格的に着手することができなかった様々な歴史資産を保存・活用する取組を進めてきた^①。特に平成二三年（二〇一一）の篠山市歴史文化基本構想策定後は、行政主体の取組ばかりではなく、構想に位置づけた集落や地区等を主体にした地域史編さんや歴史資産の保存・活用に関する取組が増加傾向にある^②。

二 資料の保存と活用の動き

ただし、古文書を始めとする資料については、市内外の研究者・機関等による調査や古典音読会の開催などの取組は実施されたものの、資料の悉皆調査などといった積極的に保存・活用する取組には着手できなかった。また、自治体史の編さんについても、合併前に旧郡町村で編さんされていたが、丹南町史や大山村史、今田町史以外は、明治以降の郡町村誌として編さんされているものが多く、旧多紀郡全体の古代から現在に至る通史及び資料をまとめた市史編さんの必要性はあったものの着手

することができない状態であった。これは大変厳しい財政状況下で、市内の重要資料の一群である市立青山歴史村の「丹波篠山藩青山家古文書」の本格的な調査・修復に着手するだけでも膨大な時間と人員、予算が必要になることが想定され、先ほどのような様々な歴史資産の保存・活用事業と並行して取り組める人的余裕がないことや国・県の補助事業等の活用が難しく、多額の市単独予算を確保しなければならないこと、また資料を専門にする行政職員もないことが要因であった。

その間、市民有志などから資料の保存・活用を求める声があり、歴史的資料整備推進の会からの歴史資料の収蔵公開のための施設整備などに関する要望や市議会でも市史編さん着手を求める一般質問などが重ねられ、市内部で検討を進めることになった。その結果、平成二四年（二〇一二）一二月の一般質問で「市制三〇年目となる平成四〇年（令和一〇年）に市史が発刊できるよう取り組めたらと考えている」、さらに平成二五年（二〇二三）九月の一般質問で「当面は中央図書館（以下、「図書館」）を拠点施設として平成四〇年の発刊に向けて準備を進めていく」という市の考えが示された。そうした市の考えが示される中、拠点施設として位置づけられた図書館では将来的な市史編さんも視野に入れつつ、市民ボランティアを中心とした資料に関わる人材育成に取り組むことになった。まずは図書館で所蔵している未整理状態の近世から近代にかけての地域資料

や旧町史編さん資料など約五〇〇〇点の保存と活用を図るため、平成二五年に市民と専門家（神戸大学）、図書館の三者が連携しながら「地域資料整理サポーター（以下、「サポーター」）」を結成した。サポーターは、地域資料に興味関心のある市民等で構成され、神戸大学教員の指導を受けながら、図書館所蔵の郷土史家が収集した資料や丹南町史編さん時の資料などの整理目録作成、翻刻のテキストデータ入力作業などを中心に組み立てている。以降、サポーターによる熱心な活動により、それまで着手できなかった資料の保存・活用が図書館を拠点として継続的に進められ、人材を育成する場となった。³ サポーターは、丹波篠山市における資料整理・調査になくはない存在となり、後の市史編さん事業でも大変大きな力となる。

三 市史編さん事業の実施

（一）令和元年度の取組／全体計画の検討

そうした図書館を中心とした取組が進められる中、平成三〇年（二〇一八）九月の一般質問で「市制二〇年（令和元年）の節目を市史編さんの契機と捉えて、取り組んでいきたい」とする市の考えが示され、令和元年度から丹波篠山市史編さん事業に着手することが正式に決定した。

初年度となる令和元年度は、事務局として図書館に市史編纂

担当を置き、館長と臨時的任用職員一名が業務を担うことになった。神戸大学の協力を受けながら、先進地である三木市や香寺町などの取組を参考に令和一〇年度までの刊行スケジュールや全体の構成、組織体制などの検討をすすめ、令和二年三月の定例教育委員会において全体計画面案について報告を行った。

その全体計画面案では、令和元年に市制二〇年を迎え、新たに丹波篠山市として歩みだしたことを契機に丹波篠山市史編さん事業に着手するとして、既刊の町史をはじめとするこれまでの市内外の研究成果や今後取り組む新たな調査研究成果を踏まえ、丹波篠山市の歴史を通史的に記述する「通史編」、地域に眠っている資料を市民と共に調査研究して編さんする「地域編」、その根拠となる有形・無形の資料をまとめた「歴史資料編」、そして「概要版」や「紀要」を、市制三〇年となる令和一〇年度を目途に刊行するとした。

（二）令和二年度の取組／コロナ禍における事業展開

初年度に作成された全体計画面案に沿って、令和二年度から編さん委員会等を設置し、具体的な編さん作業に着手することになった。事務局の体制は市史編纂担当係長一名を置き、館長と共に業務を担うことになった。最初に述べたが筆者は、令和二年度から市史編さん担当となり、前年度に作成された計画面案により事業を進めるためには、資料調査等を中心に次の大きな課

題等があることを想定した。

1 過去の郡町村史編さんで資料の悉皆調査ができていない篠山・西紀地区（現在の地域の約六四％）での資料収集をこれから行わなければならないこと。

2 先にも述べたが市立青山歴史村の「丹波篠山藩青山家古文書」は市史編さんに欠かすことができない重要資料と想定されることから本格的な調査が必須だが、現状詳細な目録までは作成できておらず、かつ固着するなど開披できない藩政日記なども多いことから、場合によっては修復も検討しなければならないこと。^④

3 近世に二〇〇を超える村・町があり、現在で一九のまちづくり協議会（明治二五年（一八九二）～昭和二九年（一九五四）の町村区域）、二六〇以上の自治会がある地域で調査を行わなければならないこと。

4 収集・調査の対象となる資料が近世から近代まではもちろん、『兵庫県史 史料編 中世六』では一冊の約九割を大山荘がしめていることや八上城跡の史跡指定に向けた学術調査^⑤で整理した史料カードも三〇〇枚を超すことから中世も膨大な資料数になる可能性があること。

5 過去の文化財の悉皆調査で約五〇〇〇点近い歴史資産が確認されており、これらを市史でどう扱うのかということ。^⑥

6 歴史文化基本構想策定以降、地域主体の歴史文化を活か

したまちづくりが進められるようになり、地域史編さんも活発に行われていることから、そういった取組と今回の地域編をどのように整理するのかということ。また先進地の自治体と比べて地区数・自治会数も多い当市で、現在の計画期間・事務局体制でどのような地域編を編さんするのかということ。

7 丹南町史編さんでは、古代から現代までの通史を二巻にまとめて刊行するのに一〇年近くかかっているが、事務局体制も当時より少ない現状を考えると、今回の事業期間一〇年で一〇巻以上刊行する計画は非常にタイトなものであること。

特に課題7にあげたように事業期間が非常にタイトなことから、課題解決の道筋を検討しつつ、とにかく全力・全速力で事業を進めなければならないところ、ちょうど新型コロナウイルスの感染拡大時期と重なり、図書館も臨時休館になってしまった。様々な対面での活動が制約されるようになってしまい、令和元年度に作成した計画案の通り進めることが困難な状況となった。本来であれば、まずは自治会長会で事業の説明を行い、資料調査等への協力を依頼した上で各地域へ入っていく計画にしていたが、対面での活動が制限される中、資料所蔵者に高齢者が多いことも想定され、かつ市史編さん事業自体が市民にまだ浸透していない段階でもあり地域へ積極的に入っていく状態

況下ではないと判断し、資料収集活動に着手することを当面延期することにした。かといって立ち止まる余裕はなく、まずは事務局でできることをこの時期に進めることにし、丹波篠山に関する様々な基礎的な資料を収集しデータ化する基礎資料調査を実施することに切り替えた。これは現状丹波篠山に関する資料がどこに何があるのか、書籍や論文など過去の調査研究文献等がどれくらいあるのかといった編さんの土台となる基礎資料が整理されていなかったことと、コロナ禍が落ち着けば、スムーズに専門部会による本調査に入れるようにしたいと考えたからである。

令和二年度から取り組んだ基礎資料調査は次のとおりである。

1 市が所蔵する資料を把握するため、図書館や文化財課、市長部局、議会、学校等が所蔵している資料の目録や原資料等を確認し、市史編さん用の目録を作成し、全体の把握に務めた（議会は令和三年度（二〇二二）、学校は令和四年度（二〇二二）に着手）。

2 丹波篠山に関する書籍や論文など過去の調査研究文献等について、図書館や文化財課の蔵書を中心にリスト化し収集する作業を実施した。またインターネット上にも様々な研究機関等から論文等が公開されていることがわかり、神戸大学の協力も得ながらそれらの収集に努めた。

3 また調査研究文献などを把握していく内に、過去に様々

な研究機関が市内の古文書調査を行ったり、収蔵したりしていることも把握できた。またそうした市外の研究機関のホームページ上に所蔵情報が多く公開されていることもわかり、市外所蔵資料の情報等をまとめる作業を実施した。

4 調査研究文献から丹波篠山に関する古代から現代に至る様々な出来事が読み取れるため、それらを年表形式にまとめる作業を行った。

5 図書館が所蔵する様々な資料を把握していくと一七世紀後半から一九世紀にかけて様々な地誌が編さんされていることが判明した。⁷ 近世に二〇〇以上の村・町がある市域において、各村・町の地理、歴史や伝承などを確認することができる基礎資料となるものであるが、筆者は残念ながら古文書をすらすらと読む能力に欠けているため、まずは公刊されている地名辞典⁸から各村・町（現在の自治会）の古代から現代にいたる変遷をまとめる作業を行った（地名辞典からの整理は令和三年度から着手）。

二年度は、こうした基礎資料調査を中心に進めながら、年度後半から神戸大学大学院人文科学研究科特命助教一名の派遣を受けることになり、さらに事務局に古文書の解説に長けた会計年度任用職員一名が採用となったことから、人員的に十分な体制とは言えないものの、以降資料整理・調査にも取り組むことになった。

コロナ禍と事務局の人員体制上の問題により整理・調査数に限界があることから、こちらから積極的に地域に入って資料調査を行うことは控えつつも、まず資料情報提供の呼びかけチラシの配布やホームページ上での呼びかけ、文化財課を始めとする庁内関係部署との情報共有などを行った。そうすると、ありがたいことに徐々に市民から資料に関する情報提供や寄付・貸出の申出が行われるようになった。これは元々市民の方々が資料に関して高い意識と探究心を持っていることと、コロナ禍などにより自宅や実家の整理を行う時期と市史編さん時期とがちょうど合致したことにも要因があるように感じている。

こうして寄付・借用資料や図書館・文化財課所蔵資料を中心に整理・調査作業に取り組むことになった。借用したもののについては、所蔵者からわざわざ声をかけていただいているものが大半であり、また所蔵者と資料とが離れる期間が長くなるのは望ましいことではないと思われるので、あまり長期間の借用にならないように手持ちの整理待ち資料数を勘案しながら、所蔵者と相談の上借用期間を決めている。また、所蔵者から資料を借用・返却する際には、できるだけ神戸大学の特命助教にも同席してもらい、所蔵者に資料の特徴や内容について分かりやすく説明していただき、所蔵者に安心・納得していただけるように努めている。資料の整理としては、原位置の記録・清掃・採番・目録作成・写真撮影・翻刻（重要資料のみ）を行い、当た

り前のことだができる限り当初借用期間内での返却に努めている。返却時にはそれまでの調査で判明した全体概要と特筆すべき事柄などを説明し、目録と写真データの提供、さらに今後の保管方法なども伝えるようにしている。また、借用時と返却時に所蔵者から資料等の由来や整理時に出てきた疑問点などについて聞き取りを行い、それらを記録簿として残すようにしている。これは数十年後の担当者が再調査を行うことがあれば必要になるデータと考え、意識的に残すようにしている。

またサポーターによる丹南町史編さん資料の整理作業も新型コロナウイルス感染拡大防止のための図書館利用休止期間が終わった六月から活動を再開することになり、旧町史編さん資料の整理作業も徐々に元通り取り組めるようになった。

また当初開催予定時期より遅れたが各委員の協力を得て、八月に編さん委員会を開催し、「丹波篠山市史編さん基本方針」を策定した。さらに十一月に通史編専門委員会及び地域編専門委員会を開催し、具体的な調査・編集方針などについて協議を行い、令和三年度から七つの専門部会を設置し、具体的に調査を進める計画となった。しかし、急遽市がコロナ禍を踏まえて全体計画を再検討する必要があるとして、専門部会の設置を四年度に見送ることになり、各委員に大変ご迷惑をおかけすることになった。

(三) 令和三年度の取組と再検討と再出発

そうしたことから令和三年度は、市内部、各委員と全体計画の再検討について協議を進めた。また基礎資料調査と寄付・借用資料等の整理・調査を継続的に実施すると共に、明治以降の旧町村の議会関係資料の現況確認を行った。

三年度から新型コロナウイルス感染拡大防止の対策をしながら市民への事業の周知啓発、資料調査を開始する必要があるため、自治会長会で事業説明・協力依頼などを行うと共に市広報紙に資料情報提供を呼びかける記事を掲載した。以降市民から定期的に情報をいただくことになり、資料の寄付、借用が増えた。特に五月には文化財課から情報を受け、近世に畑組大庄屋を務めた石田家から約四一〇〇点、九月・十二月にホームページを見られて市外の方から近世の武術関係資料の寄付の申出を受けた。また個人・自治会から数百から数千点にのぼる所蔵資料の貸出の申出を受けた。

二月には編さん委員会、通史編専門委員会、地域編専門委員会の合同会議を開催し、今後の全体計画について当初計画に沿って四年度から再出発することになり、一年遅れでの専門部会の設置も決定した。

(四) 令和四年度の取組と専門部会の設置と市民へ周知啓発

そして令和四年度は、ようやく八月に七つの専門部会を設置し、年一〜二回の会議を開催し、編さんに向けた調査計画や資料の把握・調査などに取り組んだ。また事務局の職員体制も会計年度任用職員が一名増員され、引き続き基礎資料調査と寄付・借用資料等の整理・調査を実施すると共に、市内に一四ある全小学校を訪問し、明治以降の学校沿革誌の全丁撮影を行った。さらに「市史編さん便り」の発行や「資料ミニ展示」「調査報告会」など本格的に市民への周知啓発にも取り組んだ。特に一月下旬の市広報紙に挟み込み全戸配布した「市史編さん便り」第一号の反響は大きく、発行以降ほぼ毎週何らかの資料情報をいただくようになり、寄付・借用資料も次々と集まるようになった。大変うれしい状況ではあったが、事務局の体制がそれに追いつかず、未整理資料がどんどん積み上がりつつあった。こうした状況を見るに見かねてということだったかもしれないが、二月からはこれまで長年に亘って丹南町史編さん資料の整理を進められていたサポーターが、それに一旦区切りを付け、「今急ぎで取り組むべきことは市史編さん収集資料の整理作業ではないか」ということで、今後は市史編さん収集資料を中心に整理されることになった。以来、サポーターの方々がそれぞれ興味関心のある資料群を担当し、得意な分野で資料の整理作

業を進められている。これにより資料整理のスピードが大幅にアップし、市史編さんを進める上で欠かすことのできない存在となった。サポーターの方々には感謝の言葉しかない。今後もさらに連携を深めながら取り組んでいきたい。

また六月には郷土史研究者などの有志のグループ「丹波篠山文化顕彰会」が発足し、以降二ヶ月ごとにフィールドワークなどを開催されているが、それらの活動にできるだけ参加するようにしている。さらに資料整理・調査の実務を担っている会計年度任用職員は丹波篠山市部落史研究委員会委員を務めたり、中央公民館主催の古文書講座にも参加したりと、関係団体・部署との連携を深め、市史編さん事業に関心を持ってもらえるような人の輪を広げることに努めている。その結果、資料調査への協力やサポーターへの新規加入につながっている。

(五) 令和五年度の取組（現在）

現在、令和五年度（二〇二三）に入り、事務局も市史編さん係から市史編さん室となり、職員体制も係長職一名、会計年度任用職員一名が増員された。

各専門部会では具体的な調査や編集方針などの協議などが進められている。また資料調査は引き続きサポーターの協力も得ながら継続的に取り組んでおり、これまでの状況は表のとおりである。資料の収集状況については、現在も市民からほぼ毎週

表 資料収集・調査等一覧

		令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度※	計
資料等	把握点数	0	43,000	36,000	10,037	12,154	101,191
	写真撮影枚数	0		142,000	102,819	47,024	291,843
	市民等提供者数	0	10	21	48	18	97
	（内寄付者数）	0	6	8	13	8	35
	市民等提供資料数	0	1,006	6,374	4,032	349	11,761
	（内寄付資料数）	0	983	4,308	1,325	215	6,831
調査研究文献等点数		0	2,550	450	343	148	3,491
年表記載項目数		0	3,471	3,493	12	0	6,976
サポーター	登録人数	13	16	15	17	17	—
	活動回数	未集計	46	55	40	22	163
	活動延べ人数	未集計	206	258	204	77	745
編さん委員会開催数		0	2	1	1	0	4
専門委員会開催数		0	2	2	1	1	6
部会開催数（7部会）		0	0	0	13	5	18
事務局体制	中央図書館	市史編纂担当	市史編纂担当	市史編さん係	市史編さん係	市史編さん室	—
	館長（兼務）	1	1	1	1	1	—
	館長補佐（兼務）					1	—
	再任用職員（兼務）			1	1		—
	係長（室長）		1	1	1	2	—
	会計年度任用職員	1	1	1	2	3	—
神戸大学派遣			1	1	1		—

※令和5年度は6月までの状況

のように何らかの情報を寄せていただいている。市民から市史編さん室に声を掛けていただけること、そして日々新たな多くの方々と資料に出会えることに感謝したい。

さいごに

以上、担当者から見た丹波篠山市史編さん事業のこれまでを振り返ってきた。前項までにあげた様々な課題は、予算や期間の問題を依然として抱えているものの、市史編さん事業に着手しなければ、決して解決することができないことである。スムーズにいかないことも多々あるが、幸いにして多くの市民やサポーター、専門家の温かい支援をいただきながら事業を進めることができています。市史編さん事業に着手したことは、これから長年の多くの課題を解決する大きなチャンスなのだと前向きに考え、今後も多くの方々と連携し、課題を少しずつ解決しながら、編さん後の姿も見据えた人材育成と資料の保存活用方策も視野に入れつつ、目標に向かって取り組みを進めたい。

註

(1) 個々の取組は次を参照。『城下町篠山まちづくりのあゆみ 重要伝統的建造物群保存地区選定一〇周年記念誌』篠山市、篠山市教育委員会、二〇一四、『史跡篠山城跡整備基本計画』篠山市教育委員会、

二〇一九、『重要伝統的建造物群保存地区選定一〇周年記念誌 宿場町・農村集落 福住 まちづくりのあゆみ』丹波篠山市・丹波篠山市教育委員会、二〇二三

(2) 「歴史資産」に関するこれまでの取組「丹波篠山市文化財保存活用地域計画」丹波篠山市教育委員会、二〇二二

(3) 井上勝盛「篠山市立中央図書館地域資料整理に向けて―地域資料整理サポーター結成と活動」『LINK【地域・大学・文化】』六、二〇一四

(4) 畑治男「篠山藩史料の紹介―公開中の青山歴史村所蔵史料―」『兵庫県の歴史』二八、一九九二

(5) 『八上城・法光寺城跡調査報告書』篠山市教育委員会、二〇〇三
(6) 「丹波篠山市の「歴史資産」」『丹波篠山市文化財保存活用地域計画』丹波篠山市教育委員会、二〇二二

(7) 「多紀の郷土に関する著書」『篠山通報 大正五年九月二五日』篠山通報社、一九一六、「地誌から見る知井」『令和三年度秋季特別展 森と共に生きるく知井地区を中心に』南丹市立文化博物館、二〇二一

(8) 『角川日本地名大辞典二八 兵庫県』角川書店、一九八八、『日本歴史地名大系二九巻Ⅰ 兵庫県の地名Ⅰ』平凡社、二〇〇一

(9) 今井進「多紀文化顕彰会の歩みを継承する」『放光―二〇二二年六月―』第一号、二〇二二

(10) 今井進「西誓寺文書」を中心とした部落史研究会ささやまの活動」『ヒストリア』二七五号、二〇一九